

153 文徳マサー (二) (大力)

この人は武芸者ですね、中国で空手を習ってきたとかいう人で、この、ちよんまげを結っておったんですが、もう亡くなってしまっておる。体格のがつちりしたお爺さんだったかねえ。ちよんまげを結って、顎髭をはやしとったんですがね。見ても、本当に武人らしいような人だと。

この人がですね、中国から帰って来て、昼寝しておる時に、お母さんが、

「食事ができておるから起きて食べんか」って起こしに行つたのに、起こすつもりでやつただけど、その、庭に投げられておったというんだね。自分は、投げた自分もわからなかったくらいの早さだったという。それから、投げられたのが後でわかって、

「私を起こす場合には、私にくつついては絶対起こすな。竹竿でも持つて来てね、私の上から通せばすぐ起きるから」ということで、それからは、起こす時には

ちよつとした竹棒を持つて来てね。すぐ飛び起きよつた。それくらい強かったという話です。

おもしろいことにね、この人は、外から歩く時には、必ず昔はあいあい傘というかな、日傘みたような小さいのがね、細くつてこれくらいのがあつたかね。踊りなんかを使う小さい雨傘、そういうのを必ず持つておつた。

字糸満 金城安彦

類話

字糸満 田場天龍、上原皓吉

字糸満 上原亀三

字名城 新垣武登